

目次

序	閃光のクロスロード	5
壹	怪獣王ゴジラ	15
貳	ヒトを模倣せしモノ	41
参	その恨みは海より深く	57
四	戦う意味	65
伍	パシフィック・クロスオーバー	91
六	ゲンシナガト	110
終	そして真珠湾へ	119
	後書き	124

本作は、艦隊これくしょん一艦これーを独自解釈した二次創作小説、提督&艦娘シリーズの第三弾です。第一弾、第二弾とは主役やヒロインが異なりますので、この本のみでもお楽しみすることができます。
大本の話は続いていますので、前作をお読みになれば、より一層楽しむことができます。

序

閃光のクロスロード

陸奥と長門は国の誇り。戦前の少年向けカルタで詠まれた一句だ。日本最大の戦艦は大和型だが、戦中は国民には秘匿にされており、皆に愛され慕われていた戦艦は長門型だった。

最強の座は大和に譲ったが、私こそが栄えある帝國海軍一の戦艦だ。それが長門自身の誇りでもあった。

「それが……この有様か……」

祖国から遠く離れた海上において、長門はふつと溜息を漏らす。片翼である妹の陸奥の姿は既に無く、他の戦艦も轟沈か大破着底し、終戦時唯一動ける状態にあったのは自分だけだった。

その自分も戦後は米国に接収され、洋上を航行している最中だ。これから連行される地は、マーシャル諸島ビキニ環礁。この海域で行われる原爆実験、クロスロード作戦の標的艦とされるためだ。

「誇りとまで謳われたこの長門の最期が、よりにもよ

って敵国のモルモットとはな」

敵と戦って名誉の戦死を遂げるのではなく、標的艦となって沈む運命なのは屈辱以外の何物でもないなど長門は思うのだった。

竣工以来長らく温存され、いよいよ戦場に繰り出した時は、既に戦艦の時代は終わりを告げていた。戦場で華々しく活躍する機会を与えられなかっただけに、余計に無念さを感じずにはいられなかったのだ。



「いよいよか……」

一九四六年七月一日。クロスロード作戦の第一作戦エイブルが実行されようとしていた。私の人生もこれで終わるのかと、長門は覚悟を決めた。

「なっ!? あれはっ!?」

ビキニ環礁には、一五〇隻以上の艦艇が集められていた。その中には、信じられない艦もあった。

「戦艦ネバダに、空母サラトガだ!? 奴等は、大戦

を生き抜いた武勳艦さえも標的にするといふのか!」

戦艦ネバダは、我が帝國海軍の真珠湾攻撃において座礁するも、その後修理され大戦を生き抜いた。そして空母サラトガは、幾度も我が国の機動部隊との激戦を交わし、終戦まで戦い抜いた栄えある空母だ。

他にも功績のある艦艇はおり、それほどの船までも沈めるのかと、長門は一瞬理解不能になった。

「……。ふつ、勝てるわけ、ないか……」

だが、その意味を理解した瞬間、長門は自虐的な溜息を漏らした。

米国が何故武勳艦をわざわざ沈めるのか? 答えは

至極単純だ。それは、既に無用の長物となったからだ。

戦艦ネバダの竣工は一九一六年。今年で艦齢三〇を迎えた老朽艦だ。戦場の主役は戦艦から空母に変わったのだ。最新鋭のアイオワ級を多数抱えている米国にしてみれば、旧式戦艦など用済みで当然なのだ。

ならば主役である空母サラトガは? これは老朽艦と言うよりは、数を持って余しているところだろう。

米国は最新鋭空母であるエセックス級を二〇数隻竣工させた。戦争が終わり最大の敵であった帝國海軍は既に無い。戦う相手がいないのだから、いかに武勳艦と言えど旧式空母を保有する理由などないのだ。

我が国ではミッドウェー海戦で主力空母であった赤城、加賀、蒼龍、飛龍の四隻を失って以来、その穴を埋めるべく奔走した。

だが、竣工できた大型空母は、大鳳、信濃、雲龍型の数隻に留まる。後は、改装空母で必死に穴を埋めていたのだ。

それに対し、米国は二〇隻を超える正規空母に、多数の軽空母、護衛空母をも竣工させたのだ。これほど主力艦に圧倒的差を付けられたのだから負けて当然だなど、長門は今更ながら思うのだった。

自分が標的艦とされたのは、憎き敵戦艦を処刑するためだと思っていた。だがそれは、思い違いも甚だしい。何故なら、標的艦のほとんどは米国の船なのだから。自分は単純に要らぬ船だから処分されるだけのことだ。

大戦でも荷物扱いされ、最期を迎えるにあたっても在庫処分感覚か。こうまで存在を否定され続けると流石に哀しいなど、長門は感傷的に空を仰ぐ。

「光っ!？」

刹那、長門は目を開けられないほどの閃光を浴びた。「ぐっ……あああっ!？」

それから間もなくして訪れる、骨まで融解するほどの爆風と熱線。これがあの広島と長崎を焼いた核の炎なのかと、長門は全身を焼かれながら体感した。

「はあ、はあ、はあ……」

空中爆発により装甲が焼け爛れたものの、航行に支障が生じるほどのダメージは負わなかった。

「びゃあっ!？ 火、火を消さなきゃ!？」

だが、自分と同じく標的艦となった軽巡洋艦酒匂は爆発により大破炎上し、その日の内に沈んでしまった。

「酒匂……お前が先に逝くのか……」

終戦間際に竣工し、戦争を知らぬままビキニ環礁へと連れて来られ、核の炎に焼かれて息絶える。自分より若く戦闘経験もない者が先に沈むのは、長門にとっ

て耐え難い悲しみだった。

「案ずるな、酒匂。私も今しばらくしたら行く……」

お前を一人にはしない。そう心に誓いながら、長門は死を覚悟して次作戦に臨んだ。

一九四六年七月二五日。クロスロード作戦の第二作戦ベーカーが実行された。

「ぐっ……! うううっ……!？」

二度目の実験は水中爆発。水底から巻き上がる爆風に、長門は転覆しそうになりながらも辛うじて耐えた。(もう……限界か……)

だが、二度の核爆発に耐えた身体は既に限界を迎えており、長門は徐々に迫る死の感觸を抱き始めていた。

「せめて最後に、もう一度朝日を眺めてから逝きたかったものだ……」

旭日は我が偉大なる祖国の御旗。暁の光に看取られながら息絶えるのなら思い残すことはなかったのになど残念がりつつ、七月二九日未明。長門は人知れずひっそりとその身をビキニ環礁に沈めた。

(ん？ 何だアレは!?)

海底へと沈む逝く中、薄っすらとした意識で長門は目撃した。水底に集まる無数の魂の輝きを。その光は徐々に大きくなり、青白い光の塊となる。そして光の中より、まるで古代の恐竜をより狂暴化したかのような巨獣が姿を現すのを……。



「！ 夢か……」

その日長門は、朝の訪れを告げる日の光に手を伸ばすように目覚めた。

「またか……。一体何故、これほどまでに……」

艦艇だった時代の体験を夢に見ることはよくあることだ。だが、ここ数日は連日のようにクロスロード作戦の夢を見る。何か良からぬことが起きようとしているのではないかと？ 長門は胸中に不安を抱く日々が続いていた。

「よお。長門、奇遇だな！」

「提督！」

陰鬱な気分を洗い流そうと、着替えを済ませ洗面所に向かおうとしていたところ、長門は上司である熱血提督と偶然出くわした。

鎮守府には複数の提督が所属しており、渾名で呼び合うのが通例となっている。

長門の上司に当たる彼は、筋肉質な身体にポロポロになった帽子を被り、上着を羽織って胸元を常に曝け出している、その名が示す通り熱血漢な提督だ。

戦艦を主軸とした水上打撃部隊を指揮し、頭で考えるよりも火力で捻じ伏せるのを得意とする。

「どうしたんだあ、そんな辛気臭い顔して。オメエらしくもねえ」

「いや、提督。ちよつとな……」

夢のことを話そうと思い、長門はつい言葉を飲み込んでしまう。熱血提督は男気のある人物だ。自分の相談にも快く応じてくれるだろう。

ただ、漠然とした夢の出来事なんて話しても、直情的な彼には解決しようがないのではないかと。

「おう、長門！ バツタリ会ったついでに、ひとつ走

りしねえか？」

全速力で走って汗だくなれば嫌な気分なんて吹っ飛ぶぞと、熱血提督は朝ランに誘う。

「走り込みか。悪くはないな」

確かにウジウジと悩んでいるよりはよっぽど健全だと、長門は熱血提督の誘いに乗ることにした。

「かぁー！ 走った、走った。もうヘトヘトだぜ」

その後熱血提督と長門は三〇分弱、全速力で走り抜けた。

「流石の私でも身体が限界だ」

だが、悪い気分ではない。全力を尽くすのはこれほどまでに爽快なのかと、長門は息を切らしながらも微笑んだ。

「どうでい？ 少しは話す気になったか？」

「！ 察していたのか」

「応よ！ オレ様はオメエの提督だぜ？ それぐらいのことは顔を見りゃ一発で分かるぜ！」

話し辛いことでも気分爽快になれば少しは薬に切り出せるだろうと思ひ朝ランに誘ったと、熱血提督は告

白する。

「ふっ。敵わぬな、あなたには」

だが、それでこそ私が全身全霊を尽くして仕える心に誓った提督だと、長門は微笑しながら夢の話をした。

「ふーん。それでここ数日どんよりな顔してたってわけかい」

「ああ。どうにも胸騒ぎがしてな。何かが起ころるのではないかと」

「オレ様は難しいことはよく分からねえぜ。だが、一つだけ言えることがあるぜ！」

「それは？」

「どんな困難が押し寄せたとしても、全力で当たって粉砕するのみだぜ!!」

オレ様の艦隊は今までもそうして来たし、これからもそうするだけだぜと、熱血提督は拳を握りながら不敵な笑みを浮かべる。

「相変わらず猪突猛進なお方だ。だが、確かにその通りだな」

圧倒的な火力で敵を捻じ伏せる。それが戦艦の矜持であり、自分が前世で成し得なかったことだと。

「さて！　ひとつ風呂浴びて、それから朝飯だ!!」

「ああ！」

運動した後の飯は格別だぜと軽快な声で語る熱血提督に相槌を打ちながら、長門は庁舎内へと戻って行く。

（それにしても、最後に見たアレは一体……）

連日見せつけられる自身の最期の光景。だが今日のはいつもと違っていた。海底から這い上がって来たあの巨獣は一体何なのか？　あれこそが私を悩ませている悪夢の元凶なのかと、長門の胸中の不安度は増していくのだった。



「びゃああ……怖いよ……怖いよ……」

そう——クロスロード作戦の夢を見ていたのは、何も長門だけではなかった。長門に先んじて沈んだ酒匂もまた、毎晩のように悪夢にうなされていたのだ。

「酒匂ちゃん。その様子だと、今日も見たようミャー」

頭から布団を被り、瞳孔を開きながらガクガクと震える酒匂の部屋に、彼女の上司である変人提督が様子を見に訪れた。

「し、司令……！」

変人提督の姿を見るや否や、酒匂はさすがのように胸元へと抱き付く。

「司令、あのね、あのね！　酒匂、夢の中でピカッとした光に襲われるの。それからすぐ爆風に巻き込まれて、身体中を焼かれながら沈んじゃうの……」

クロスロード作戦の光景が毎晩脳裏に蘇り、酒匂の精神は極限まで困憊していた。

「びゃあ……。もうヤダよ……。司令、なんとかしてよ……」

どうすればこの悪夢から解放されるのと、酒匂は救いを求めるように変人提督に訴がる。

「よしよし。怖かったんだねー。でも、もう大丈夫ミャー。ミャーが付いてるから、酒匂ちゃんは何があ

つても沈まないミヤー」

だから夢のことはもう忘れて、今日は楽しく過ごす
ミヤと、変人提督は酒匂の頭をナデナデしながら心を
落ち着かせる。

「びゃあ……。司令、ありがとうっ！ 酒匂、ちよつと
だけ元気になったよ！」

変人提督に癒され、酒匂の瞳には僅かながら光が灯
った。

「うんうん。今日は訓練とかしなくていいから、朝ご
飯を食べてゆつたり過ごすといいミヤー」

「はい！ 酒匂、ご飯行って来ます」

変人提督に感謝の敬礼をいつつ、酒匂は自室から
食堂へとびよんびよんスキップするように向かう。

「うーん。空元気ミヤねー」

精神的な疲労を抱えながらも何とか正気を保とうと
努めているようにしか見えないと、変人提督は一人呟
く。

「酒匂ちゃんには大丈夫だって言ったけど、実際、大
問題ミヤねー」

艦娘の見る夢は、少々特殊なものだ。それは、艦艇
時代の記憶を、あたかも人間体で体感したかのように
見せられるからだ。

そのような夢を見るのは、前世での経験を精神に
馴染ませ、現世界における経験則としようとする本能
的な行動原理であると、変人提督は思っている。

だが、その夢は今回の酒匂のように、己の最期とい
う耐え難い記憶を呼び起こす場合もある。確証はない
が、艦娘が最期の時の夢を見るのは、何かしらの前兆
であると言われている。

特に今回の場合酒匂だけではなく、長門はもちろん、
来日して間もないプリンツ・オイゲンもクロスロード
作戦時の夢を見るのと話だ。

近々、深海棲艦がクロスロード作戦に準じた作戦を
敢行するのではないかと、変人提督は危惧している。

「うーん。やつぱりコミュニケーションを取ってみる
しかないみたいミヤねー」

そう呟きながら、変人提督は一人鎮守府の地下へと
降りて行くのだった。



鎮守府の地下には営倉が設けられていた。変人提督はその最奥、嚴重な鉄格子に隔離された一室へと足を運ぶ。

「うーちゃん。様子はどうかミャー？」

その営倉で捕虜を監視している卯月に、変人提督は声をかける。

「司令官ー。いつも通りぴょん」

こつちが与えたご飯は貪るように食べるけど、全然コミュニケーションを取ろうとしなくて、呻き声をあげながらこつちを睨んでるだけぴょんと、卯月は報告する。

「朝のお勤めご苦労様、うーちゃん。後は食堂に行つて朝ご飯取るミャー」

「了解でえすつ！」

卯月はピシッと敬礼し、ぴょんぴょん飛び跳ねながら食堂へと向かう。

「さてと……おつはよー！ 元気にしてるかミャー、ヲ級ちゃん!!」

周囲の暗い雰囲気吹き飛ばすような明るい挨拶をする変人提督。その相手は、かの潜水母娘戦において捕虜となった空母ヲ級であった。

「ヲツ!?……ヲヲヲツ!!」

変人提督の姿を視認するや否や、営倉の片隅にうずくまっていたヲ級は、不気味な声をあげながら急接近する。

「ヲツ！ ヲツ！ ヲツ！」

変人提督に掴みかかる勢いで鉄格子をガシガシと揺らすヲ級。しかし、頭のクラゲ状の艤装も外され武装解除されたヲ級には、鉄格子を破壊する腕力はなかった。

「うーん。やつぱりミャーたち人類を恨んでるみたいミャーねー」

深海棲艦の原動力は恨みではないか。眼前にいるヲ級が生まれ出た瞬間を目撃した少年提督は、以前自分にそう語った。このヲ級ちゃんの行動を見る限り、そ

の推察は的を得ているだろう。

だが問題は、その恨みの根源が何であるかということだ。人類を恨むのはいい。ならば、いかような理由で恨んでいるのか？ その理由を変人提督は知りたくて仕方なかった。

「やっぱり、アレをはめるしかないみたいミャねー」

横須賀鎮守府司令長官には頑なに禁じられたが、ヲ級ちゃんとコミュニケーションを取るにはこれしかない、変人提督はポケットから小さなケースを取り出す。

「ヲ級ちゃん、ちよつとだけゴメンねー」

変人提督は一言断りながら、鉄格子を掴んでいるヲ級の左手の薬指を無理矢理引き剥がし、手に持った指輪をはめる。

「ヲツ！ ヲヲヲツ!？」

変人提督の取った行動が理解不能で、ヲ級は戸惑いの唸り声をあげるだけだった。

それもそのはず。何故ならば、彼女の左手の薬指にはめられたのは、本来深海棲艦には与えられるはずも

ない指輪。

そして、自分自身を窮地に追いやった元凶でもあるからだ。

そう——変人提督がヲ級の左手の薬指にはめた指輪。それは、提督と艦娘の信頼と絆の証であるケツコン指輪だった。

「ミャフツツ！ これでミャーとヲ級ちゃんは、夫婦のような関係ミャー」

こつちが好意を見せたことをキツカケにヲ級ちゃんも心を開いてくれるはずミャーと、変人提督は上機嫌に微笑む。

「ミャーとお話してできるようになったら、檻から出してあげるミャねー」

深海棲艦と強い信頼と絆によって結ばれた時、一体どのような奇蹟が起きるのか今から楽しみミャーと、変人提督はウキウキしながらクルクルと回るように営倉を後にするのだった。

「ユビ……ワ……？……ケツコン、ユビワ……？」

惹かれるような目で、己の左手の薬指に目を向ける

ヲ級。それは、ヲ級が初めて人語を発した瞬間であったのだ。



中部海域に位置するW島。嘗て深海棲艦の手に落ちていたこの島は、艦娘たちの奮戦により奪還に成功していた。

ハワイ攻略の足掛かりとなるW島を奪われたままにはしておけないと、深海棲艦は再占領を目論み、ゲアノ環礁より駆逐棲姫を旗艦とした部隊を出撃させた。

「ナンダ アレハ？」

敵の虚を突こうと、W島の南に位置するタンキニ環礁経由で襲撃をかけようと同海域を航行していた時だった。何やら刃物のように鋭く連なる背びれを海面に出しながら泳ぐ生物を目撃した。

「ハグレクチクカ？ イヤ チガウツ!？」

当初はどこかの部隊よりはぐれた駆逐級だと思った

駆逐棲姫。だが、徐々に海面から姿を現す巨大な影に、それが未知の生物であることに気付き、戦闘態勢に移行しようとする。

「ギイヤアアオオウウウウツ!!」

「ウツ ウワーツ!？」

駆逐棲姫は海上を揺らすかのような咆哮をあげながら姿を現す生物を目撃した。

その姿は、長門が夢で見た巨獣そのものだったのだ。

遡ること数日前。W島へ異動となった元横須賀鎮守府所属の根暗提督は、配下の潜水艦娘たちによる哨戒任務を指揮していた。元來人前が苦手な彼にとつて駐留員の少ないW島勤務は栄転と言えた。

「異常無しでち」

哨戒任務に出て二時間ほどが経過したが、今のところ敵影無し。

グアノ環礁より敵艦隊が出撃したという情報があったにも関わらず、こうまで会敵しないとかえって不気味だと思いつつ、伊五八は他の潜水艦娘たちと海中を警戒しながら航行していた。

「ん？ 何かしら？」

北緯一度、東経一六五度の海域に位置するタンキニ環礁近海を哨戒していた時だった。伊一六八が、海底で何かが蠢いているのを発見した。

「もしかして、深海棲艦かな？」

深海棲艦はその名の通り、深海から出現すると書かれている。もつとも、実際に深海から出沒した瞬間を目撃した例はない。ひよつとしてこれが初遭遇と、伊四〇一は胸を躍らせる。

「ん〜！ イクの魚雷がウズウズするの〜！！」

伊十九は先制攻撃なのねと、蠢く物体に酸素魚雷を発射した。

「やった！ 命中なのね！！」

ゴワンと水中で何かが砕ける音を聞き、伊十九は魚雷が命中したとばかり思った。

「待って！ 様子がヘンよっ！！」

聞こえた音に伊八は違和感を覚えた。仮に魚雷が命中したのなら、爆発音が聞こえるはずだ。さっきのは違う。まるで、魚雷を握り潰したような音だと……。

「握り潰したって、いくらなんでも……」

深海棲艦にそんな芸当できるわけないと、伊一六八は首を傾げる。

「こっ、この音はなんでち!?」

鈍い音が聞こえた方から高速で接近する音。この速

度は潜水艦のものではない。やはり深海から出現した深海棲艦なのかと、潜水艦娘たちは一斉に臨戦態勢を取り、魚雷を発射する。

しばらくすると、ゴウンゴウンと音が聞こえた。やはり潰れる音しか聞こえない。

一体どんな新手の深海棲艦なのかと、潜水艦娘たちは警戒心を強める。

「ちっ、違う！ 何、アレ……」

しかし、迫り来る敵に、伊四〇一は本能的な恐怖を抱いた。

それは今まで確認したことのない、巨大な外見をしていた。そしてその巨大生物の背びれが青白く光った時には、既に勝負は決していたのだ。



(みんな、早く戻って来ないかな〜)

一方その頃洋上では、旗艦である潜水母艦大鯨が、潜水艦娘たちの帰投を待ち侘びていた。彼女は潜水艦

娘たちの洋上補給を主任務としている。具体的には、彼女たちの昼食を持ち運んでいる形だ。

哨戒任務は午前中にW島を出撃し、日没には帰投する形となっている。その間W島には戻らず、正午頃にはどうしても空腹が襲って来てしまう。腹が減っては戦はできぬということで、潜水艦娘たちにとって彼女は掛け替えのない存在だ。

「えっ!？」

潜水艦娘たちが哨戒任務に従事している方角で、大鯨は奇妙な閃光を目撃した。それは、海底から青白い光がせり上がって来るような光景だった。

「みっ、みんな!？」

嫌な予感がする。何事もなければいいと潜水艦娘たちの安否を心配しつつ、大鯨は光を目撃した海域へと急行するのだった。

「あっつい！ 何なのこれ!？」

青白い光が目撃された場所に近付くと、大鯨は跳ね返る水しぶきのあまりの熱さに、思わず声をあげる。この尋常ならぬ熱さ。海底からマグマでも噴出したの

だろうか？　だがそれでは、先程の光は説明できない。青白い光は、呉で目撃した“あの光”をどこことなく思い起こさせる。いやまさか、そんなはずは……。タンキニ環礁近海で一体何が起きているのだ、彼女の胸の動悸は早まる。

「えっ!?　きゃああー!?」

海面に浮上する物体を目にし、大鯨は悲鳴をあげる。何とそれは、全身が見るも無残に焼け爛れた姿に変わり果てた潜水艦娘たちだった――。



「一体何があったのだ、大淀!？」

朝食を取ろうと食堂に向かっていた最中、血相を変えた大淀に連れられ、長門は鎮守府に隣接する軍病院へと赴いた。

「実は数日前、中部海域で哨戒任務に従事していた根暗提督の艦隊が、タンキニ環礁近海において謎の攻撃に遭ったのですが……」

「謎の攻撃?」

「はい。何でも、海が青白い光に包まれたと――」

光の元に向かった大鯨が発見したのは、全身に大火傷を負った潜水艦娘たちだったと。

「負傷の深刻さから直ちに二式大艇で横須賀鎮守府の軍病院に搬送されたのですが、潜水艦娘たちは全員大破。損傷が酷く、絶対的耐久力も尽きたということですよ……」

つまりは、五人の潜水艦娘はみな艦娘としての生涯を終えたということだ。一度に五人もの艦娘が戦闘不能になるのは前代未聞。シヨックのあまり根暗提督は自室に引き籠り、大鯨も潜水艦娘たちを守り切れなかったことを悔い、ずっと泣き続けているとのことだ。

「そうか。しかし……」

根暗提督と大鯨の気持ちは痛み入る。だがそれ以上に、長門には気掛かりなことがあった。中部海域タンキニ環礁。その地は、前世界においてあのクロスロード作戦が行われたビキニ環礁があった場所に他ならぬからだ。

「大淀よ。私にわざわざ報告したのは、何か意図があるってことだろうか？」

部隊の損害報告ならば、軍情上層部に行えばいいだけのことだ。一介の艦娘に過ぎない自分にわざわざ報告する義理はないはずだと。

「はい。潜水艦娘たちの負った火傷が、あまりに異様だったので……」

口で説明するよりも実際に見てもらった方が早いと、大淀は軍病院内の艦娘特別治療棟へと長門を招き入れた。

「これはっ!？」

潜水艦娘たちの姿を目にし、長門は絶句した。何故ならば彼女たちが負った火傷は、全身が黒く焼け爛れ水泡ができている有様だったからだ。

「ええ。そうです……。この症状は、あの光」に巻き込まれた方々の火傷に酷似しています……」

私はあの光は遠くから見たのですが、長門さんなら私たち呉大空襲で大破着底した艦娘たちより詳しいでしょうと、大淀はショックを隠し切れない声で呟く。

「あっ、ああ……」

「検査を行ったところ、潜水艦娘たちは全員被曝していることが判明しました……」

つまり、大鯨が見た青白い光は海中での核爆発によるものではないかと、大淀は推測する。

(まさか、深海棲艦は核実験を行っているのか!?)

もしそうであれば、深海棲艦との戦いは今までにないくらい深刻なものになると、長門は身震いする。

「でっ……でち……!？」

そんな時だった。伊五八が小さな呻き声をあげた。

「おい! ゴーヤ! 一体、一体何があったんだ!？」

その容体ではまともに話せないのは百も承知だ。しかし、無理を承知で惨劇の一部始終を語って欲しいと、長門は懇願する。

「かつ、かつ……怪獣でち……」

「怪獣っ!？」

「海底で、巨大な影が蠢いていたんで……」

新海の深海棲艦かと思った潜水艦娘たちは、咄嗟に魚雷を放ったとのことだ。

「でも……現れた怪獣には全然通じていなかったでち……。手強い相手だと思つて逃げようとしたんでちが……怪獣の背びれが青白く光つて、口から熱線を吐き出したんでち……」

その熱線に巻き込まれこのような有様になったと、伊五八は凄惨な遭遇戦を語るのだった。

「まっ、まさかっ!？」

長門の脳裏に蘇る光景。間違いない。潜水艦娘たちを襲った怪獣は、今朝夢に見た異形の存在だど——。



「酒匂っ!？」

戸惑いを隠せない中、軍病院から食堂へ赴く長門。

その場で見たのは、ボーっとしながら朝食を取っている酒匂の姿だった。

「えっ? あっ! 長門さん、おはようびゃんっ!」

しばらくしてから長門に気付き、ニッコリと笑いなから挨拶する酒匂。

「酒匂……」

一向に進んでいない食事。目にできた限。酒匂の笑顔が作り笑いであるのは誰の目から見ても明らかだった。

「酒匂、その様子だどやはりお前も夢を……」

「ゆっ、夢つ……びゃあぁぁー!？」

長門が夢を口にした瞬間、酒匂は箸をガラツと落とすと共に顔からは笑顔が消え、嗚咽交じりの悲鳴をあげるのだった。

「火っ、火がーっ!?! 酒匂の全身を焼いて……あぁあっ!？」

「酒匂っ! すまん! もう大丈夫だ、大丈夫!!」

瞳孔を開きながらガクガクと震える酒匂を、長門は力強く抱き締める。

どこか共感が欲しかった。同じ夢を見る同士が言葉を交わせば心が軽くなるの甘い考えがあった。その軽率な行為が立ち直りかけていた酒匂の心を再びどん底へと突き落としたのだと、長門は酷く後悔する。

「びゃあ、びゃあぁぁ……」

「酒匂、すまなかった！ あの時お前を守ってやれなくて……。だが今度は違う。必ずお前の心を救ってみせる……!!」

自分の胸の中で泣きじゃくる酒匂を介抱しながら長門は決意する。悪夢の根源をこの手で排除すると。



「長門さん、無茶です！ あなただって……！」

「無茶は百も承知だ。だがやるしかない！ 酒匂のためにも!!」

必死に制止する大淀を押し切り、長門は発着所を指す。二式大艇でW島に急行し、怪獣を叩くと。

「敵の正体は不明です。情報が揃わないうち出撃するのは危険です！」

ましてやあなただって悪夢に苛まれているという話ではないですか。酒匂さんのためと言いつつ、自分の心の平穏を取り戻すためにと焦っていますと大淀は指摘する。

「分かっている！ だがこのままでは酒匂の精神は持たない。私はもう、二度と酒匂を失いたくはないのだ!!」

「長門さん……。敵の正体は不明ですが、一つだけ判明していることがあります……！」

それは、怪獣の吐く熱線が多量の放射性物質を含んでいることだと。

「ですから編成は、少しでも放射性物質の知識を有した者が望ましいと思われます」

「大淀！ では!!」

「はい。もうあなたを止めはしません。その代わり、私も参ります！」

私も、八月六日の“あの光”を見た者ですから、大淀は眼鏡の縁を右手の人差し指と中指で上げながら応える。

その後長門と大淀は横須賀鎮守府司令長官の元へと出頭する。司令長官は難色を示しつつも事の重大さは十分理解し、二人の出撃許可を下すのだった。

「待ってください！」

数時間後、W島に向かおうとする二人の前に、駆け足で近づく艦娘の姿があった。

「お前は、大鯨……ではないな」

その姿は潜水母艦ではなく、軽空母の艤装を身に付けていた。

「はい！ 潜水空母大鯨改め、軽空母龍鳳です!!」

龍鳳は語る。自分は非力な潜水母艦であったため、可愛い潜水艦娘たちを傷付けた怪獣に反撃できず、連れ帰ることしかできなかった。その悔しさを胸に泣きじゃくった末、仇を討つため軽空母に改装する決意をした。

「実際に光を目撃した私の知識は存分に役立つはず。それに私も……」

呉で“あの光”を見た者ですからと、龍鳳は語る。

「分かりました。司令長官への許可は私が取ります」

あなたの決意を無駄にするわけにはいきませんと、大淀は静かに頷く。こうして長門、大淀、龍鳳の三人は未知の怪獣を討伐すべく、W島へと急行するのだった。



「どもども、青葉です〜!」

W島に着くや否や、青葉が自己紹介を兼ねた挨拶をして来た。

「お久し振りです、青葉さん。そちらの援軍は他に日向さんと雪風さんでよろしかったんですね」

「はい、そうです〜」

「日向だ。今回の指揮は君に頼むよ、大淀」

「はいっ、雪風です！ よろしくお願いしますっ!」

青葉に紹介され、挨拶をする日向と雪風。彼女等三人は呉鎮守府所属で、今回の作戦の話聞き志願したとのことだった。

「ん？ 日向と青葉はいいとして、何故雪風が？」

雪風は呉の雪風の異名を誇るように、呉鎮守府とはゆかりのある艦娘ではある。しかし、“あの光”を見てはいない。今回のメンバーとしては不適任なのだと、長門は疑問を呈する。

「何、今回の相手が海中戦闘能力を有しているのを考慮すれば、少しでも対潜能力を保有した者がいた方がいいだろう」

もつともその意味では青葉が不適任になりそうだが、彼女は未知の敵の撮影に躍起になっているのだから勘弁してやれど、日向は苦笑する。

「はいっ！ 潜水艦娘のみなさんが遭遇したのは、

「ゴジラ」だと思いますっ！」

「ゴジラ？」

前世界で一九五四年に公開された特撮映画、ゴジラ。水爆実験で住処を失われた恐竜が放射線の影響で体長五〇メートルの怪物に変貌し、人類に牙を剥く話だ。「話を聞いて、雪風ピンと来たんですっ」

雪風は語る。映画のゴジラは、通常兵器が全く通じない生物である。

「通常兵器が効かないだど!?」

では我々の戦力では歯が立たないということかと、長門は目を見開く。

「あくまで映画の話なので、気にしないでくださいっ」

とにかく実際に遭遇してみないと分からないと雪風は語る。

「ゴジラですかあ。いいネーミングですぬ〜。せつかくだから、ゴジラって呼ぶことにしましょう〜」未知の敵を怪物と呼び続けるのも味気ないのでゴジラと命名するのはどうだろうと、青葉は提案する。

「ゴジラか。コードネームとしては悪くはないな」

真っ先に長門が賛同し、他からも特に異論が出なかった。

こうして戦艦長門、航空戦艦日向、軽空母龍鳳、重巡洋艦青葉、軽巡洋艦大淀、駆逐艦雪風の六名によるゴジラ討伐艦隊が、W島を抜錨するのだった。



「さて、今回の作戦について改めてご説明します」索敵開始地点に着くと、大淀が作戦概要を話す。

「ゴジラは恐らく移動を続けていると思います」

なので、環礁方面に索敵機を飛ばしつつ探信儀で周

囲を警戒し、発見に勤しむとのことだった。

「そして肝心なのは、至近距離での攻撃は絶対に避けることです」

ゴジラが吐く熱線は放射性物質を含んでいる。近接戦闘は被曝のリスクが増すから厳禁だと、大淀は念を押す。

「私と雪風さんは海中探索に専念しますので、索敵の方は皆さんにお願い致します」

「了解だ。戦艦長門、これより索敵を開始する！」

長門は頷き、零式水上偵察機を発艦させる。

「瑞雲、発艦！」

続いて日向が瑞雲を発艦させる。

「では私は、三式指揮連絡機を発艦させます！」

これなら偵察だけではなく対潜攻撃もできますと、龍鳳は潜水艦娘たちの仇討ちをするんだと決意めいた顔で連絡機を発艦させるのだった。

「ではではー。青葉も特別な観測機を発艦させちゃいます！」

最後に青葉も零式水上観測機を発艦させるが、本人

が言うように、通常の観測機ではない。機体に小型カメラを搭載した特注品だ。取材に目がない青葉は妖精たちをカメラでの撮影をこなせるよう訓練を積み重ねたのであった。

「駄目ですね。海中の方は異常無しです」

「雪風もですっ！」

三〇分が経過したが、海中での反応は皆無だった。

「龍鳳の方も、発見できません」

「うーん。なかなか見つかりませんね〜」

一刻も早く発見してゴジラをカメラに収めたいと、

青葉はウズウズして仕方なかった。

「待て！ 私の瑞雲が何かを発見しようだ！」

それから四五分が経過した時、日向の瑞雲から報告が上がった。

「何を発見したんだ、日向」

「ああ。何やら海面を航行中の背びれを目撃したということだ」

明らかにサメの類ではない。ひよつとしたらこれがゴジラではないかと、日向は長門に答える。

「日向さん、座標を教えてください！」

今すぐ艦載機を発艦させますと、龍鳳は鋭い目付きで訴える。

「あつ、ああ」

日向の報告によれば、背びれはタンキニ環礁の西北西三二〇海里の場所で目撃されたとのことだ。

「ありがとうございます！ 龍鳳、行きます!!」

龍鳳はお礼の言葉を述べつつ、発見された方角に向けて艦載機の矢を飛ばす。

「待ってください、待ってください！ 青葉の観測機が到着するまで待ってください！」

万が一撃沈してしまったらせつかくのスクープを逃してしまおうと、青葉は急いで現場に観測機を飛ばすのだった。

「到着しました！ これより攻撃開始です!!」

龍鳳は現場に艦載機が到着するや否や、海中を航行中の背びれに向け対潜攻撃を開始する。

「ふう。何とか間に合いましたあ」

それから間もなくして青葉の観測機も到着して、早

速モニタリングを開始する。

「青葉さん、現場の様子はどうですか？」

「あつ！ 効果があつたみたいですね!!」

背びれが大きく蠢き出しました。先程の攻撃でダメージを与えられたみたいですが、青葉は無邪気にはしやぐ。

だが、間もなく青葉は自分が思い違いをしていたことに気付く。その躍動は、大いなる厄災の始まりであったことに。

「わっ！ わっ!？」

背びれの動きは激しさを増し、周囲には波が渦巻く。

「ギイヤアアオオウウウウツ!!」

背びれを青白く輝かせながら海中より姿を現す巨獣。全身が黒ずんだ鱗に覆われ、刺々しい背びれを持った全長五〇メートルはあるとかという直立二足歩行の生物。その鋭く威圧感のある眼光は、この世の全てを破壊せんと睨み付けているようであった。

「あつ！ ああつ……」

上半身を海上に現すや否や、口から放射熱線を吐く

ゴジラ。その一撃により、龍鳳の艦載機は灰燼と化してしまふ。

「ぜつ、全滅!? そんなっ……」

海中から姿を現したゴジラは無傷。決死の攻撃は全く効果がなかったばかりか瞬時に喪失。復讐心に燃えた心がガラガラと崩れ去り、龍鳳は顔面蒼白になる。

「まだだっ! 日向、行くぞ!!」

「分かっている! 主砲一斉射! てー!!」

爆撃が駄目ならと、長門と日向は同時にゴジラに向けて主砲を斉射する。現地点よりゴジラまでの距離は約一四海里。命中率は劣るが、主砲が届かない距離ではない。

「命中です! でも……」

砲弾が当たったには当たった。だが徹甲弾はゴジラの皮膚を貫けず、弾き返されるだけだった。

「グアアオウツッ!」

ゴジラは砲撃があつた先に身体を向け、前倒しになりながら再び海面に潜る!

「はっ、速いですっ! この速力は三〇、いえ、四〇

ノット以上あります!」

ゴジラが獲物に向かい泳ぐスピードは島風すらも凌駕すると、青葉は息を飲む。

「くっ! こうなったら迎え撃つまでだ! 大淀!!」

近接戦は厳禁などと悠長なことを言ってられる余裕はないと、長門は声を荒げる。

「止むを得ません! 第一種戦闘配置!! これより我が艦隊はゴジラを迎え撃ちます!!」

四〇ノット以上の速力を誇るのであれば、後退したところでいずれ追い付かれる。それならば少しでも反撃した方が賢明だと、大淀は苦渋の決断を下す。

「海中に潜ったなら、また上半身を出すはずで、その隙を狙えば!!」

ゴジラに一矢報いられるはずだと、龍鳳は躍起になり艦載機を発艦させる。

「待て! それではまた熱線に焼かれるのが関の山だ!」

危険は伴うが、爆雷でゴジラを誘い出した後爆撃すればより効果的だと、長門は意見する。

「確かにそれがいいかもしれませんね。雪風さん！」

「はいっ！」

雪風は頷き、大淀と共に迫り来るゴジラに爆雷投下しようとする。

「見えました！ 爆雷投下です!!」

海面を切り裂くように前進する背びれ目掛け、雪風は爆雷を投下する。

「ギイヤアアオウウツッ！」

無論爆雷など通じるはずもないのだが、ゴジラは攻撃に触発され海上へと繰り出そうとする。

「熱線が来ます！ 回避運動準備!!」

「了解ですっ！」

即座に避ければ一撃を食らわないはず。そう思い指示を出す大淀だったが、重大な見落としをしていた。

それは、ゴジラは放射熱線を吐く前、背びれを青白く発光させるということだ。つまり、その動作がないということ……。

「えっ!? きゃあああっ!?」

海上へ姿を現したのはゴジラの上半身ではなく、長

い尻尾だった。ゴジラは海上で回転するように大淀に尻尾を叩き付ける。攻撃を完全に見誤っていた大淀は敢え無く全身の骨を折られながら吹き飛ばされてしまう。

「おっ、大淀さん!」

青葉は大声をあげながら大淀を救助しようと吹き飛んで行つた方向に針路を変える。

「あわわっ! やっぱりゴジラですっ!」

難を逃れた雪風だったが、海面にそびえ立つ巨体を曝け出すゴジラに気圧され、足が竦んでしまう。

「雪風、逃げるー!」

このままでは雪風が危ない。危険を察知した日向は注意を自分に逸らそうと前進しながら主砲斉射してゴジラに挑む。

「ギイヤアオウウツッ!!」

ゴジラは迎え撃たんと背びれを青白く発光させ、放射熱線を吐く。

「回避運動! 駄目だ、間に合わないっ!」

回避し切れないと思つた日向は咄嗟に左腕をかざし、

飛行甲板を盾代わりにして攻撃を防ごうとする。

「ぐあっ!？」

日向の左腕は飛行甲板ごと熱線に焼かれ、二の腕より下を完全に焼失してしまう。

「日向さん!? よくも、よくもーっ!!」

みんなの仇を取りますと、龍鳳は放射熱線を放ったことにより生じた隙を狙うように彗星による急降下爆撃を敢行する。

「グオオオウウッ!」

ゴジラは目前まで迫った彗星を迎撃しようと、その巨腕を躍動させる。

「えっ!? そんなっ、そんなあ……!」

まるで蠅を叩き落とすように次々と彗星を撃墜するゴジラ。決死の思いでの一撃が全く通じず、龍鳳は生氣を失いガクンと海面に膝を付く。

「みんなっ!? くっ!」

せめて一矢報いねば仲間が無念は晴らせないと、長門はゴジラに主砲を向ける。

「沈めっ! 沈めーっ!!」

砲塔が焼き切ればかりの勢いで、四一センチ連装砲を撃ちまくる長門。

「ギイヤアアアオッ!」

長門の決死の攻撃はゴジラの皮膚を貫けず、ゴジラは長門ににじり寄る。

「グウウッ!」

「ああっ!？」

迫り来るゴジラと視線が合い背びれの光を見た瞬間、長門の脳裏には己の最期がフラッシュユバツクする。

放射熱線に身を焼かれれば、*あの光*を浴びた時のような末路を迎えてしまう。そう思うと長門は恐怖のあまり戦意喪失してしまい、身動きが取れなかった。「えっ!？」

もはやこれまでと観念した時だった。突如ゴジラに投下される爆撃。機種を見る限り艦娘ではなく、何と深海棲艦のだった!

今の攻撃は一体どこから、ゴジラは深海棲艦の仲間ではなかったのかと、長門は動揺する。

「グウウ……!」

ゴジラは爆撃に反応し、艦載機が飛び立って来た方向に針路を変え、再び海面へと潜るのだった。

「助かった、のか……?」

自分に興味を失い去り行くゴジラの背びれを眺めながら、長門は一命を取り留めたことにホッと胸を撫で下ろす。

「くっ……ははっ! あああああっ!」

長門は額を右手で覆いながら一しきり空笑いした後、悔し涙を流しながら嗚咽交じりの叫び声をあげる。

酒匂の不安を取り除くべく勇ましく抜錨した結果がなんだ! 自分の攻撃は全く通じなかった! それどころかゴジラを前に脅え、命を取り留めたことに一瞬でも安堵した!!

深海棲艦相手に一度も臆することのなかったビッグ7の私ごと、長門は自身の誇りをズタズタに切り裂かれ、ただただ泣き叫ぶことしかできなかった。



「青葉、無事に大淀さんを救助しました!」

「そうか。ご苦労」

数分後、大淀を抱えた青葉が合流し、長門は劣いの言葉をかける。一連のゴジラとの戦闘による戦果は、大破二、戦意喪失三と、こちら側の完全敗北だった。

「我が艦隊の被害甚大。これよりW島に帰投、」

「待ってください! 青葉はここに残ります!!」

意識を失った大淀に代わり撤退命令を出そうとする長門だったが、言葉を言い切る前に青葉に制止された。

「青葉! どういうことだ?」

「青葉はこの海域に留まり、取材を続けます!」

「ビシッと敬礼し、己の信念を伝える青葉。」

「危険だ! ゴジラの強さは身を持って知っただろう?」

ゴジラに関する情報は十分集まっただろうと、長門は青葉の意見具申を拒否しようとする。

「いえ。まだ不十分です。何故なら……」

先程行われた攻撃は、深海棲艦によるものだと聞く。その行動を見る限り、ゴジラは深海棲艦の戦力ではな

い可能性が高い。

「それなら、ゴジラとは一体何者なのか？ 青葉、気になりますっ！」

その正体を少しでも明かさな限り撤退はできないと、青葉は一步も譲らない。

「しかし……」

「いえ、青葉さんの言う通りです……」

そんな時だった。意識を取り戻した大淀が弱々しい声で呟く。

「大淀！」

「いいですか、長門さん。ゴジラの正体ですが……深海棲艦が何故ゴジラを攻撃したのかも気になります……」

その理由が判明すれば深海棲艦との戦いにも変化を与えられるのではないかと、大淀は助言する。

「……了解だ。だが、青葉一人だけを残しておけぬ」

私もこの場に残りゴジラと深海棲艦との戦いを見届ける。負傷した日向と大淀の曳航は龍鳳と雪風に頼むと、長門は命じる。

「了解です。悔しいですけど、もう私にはどうすることもできないですから……」

二度もゴジラを前に何もできなかったと、龍鳳はすっかりと意気消沈しながら命令に従う。

「了解ですっ！ 長門さん、あのゴジラは、雪風が映画で見た以上の強さです……」

自分が見た映画のゴジラは熱線ではなく、発火性の息で対象物を溶かしたり爆発させたりするレベルだったと。

「そうか。貴重な情報提供、感謝する。二人を頼んだぞ！」

「はいっ！ 長門さんと青葉さんもご武運を!!」

そうビシッと敬礼し、雪風は龍鳳と共に日向と大淀を連れて離脱するのだった。

「長門さん。只今観測機がゴジラを補足しましたー」

「了解だ。深海棲艦側の戦力は分かるか？」

「ちよつと待ってください。情報によりますと、戦艦棲姫二隻、空母棲姫二隻、重巡り級改フラッグシップ一隻、軽巡ツ級エリート一隻のようすー！」

観測機からもたらされた続報を長門に伝える青葉。

「むう。敵も本気ということか……」

敵編成は、鎮守府の主戦力を以てしても拮抗に持ち込むのがやつとの相手だ。それだけの大規模戦力を投入するということは、深海棲艦は確実にゴジラを屠ろうとしているのだと、長門は状況分析する。

「んー。これはひよつとしてひよつとするかもしれないせんねー」

深海棲艦側の目論見は分からない。しかし、それだけの数を揃えれば怪獣を倒せるのではないかと、青葉は手に汗を握りながら動向を見守るのだった。



「コノウラミ ハラサセテモラウ……!」

憎悪の炎を燃やしながら航行中のゴジラに攻撃命令を下す戦艦棲姫。深海棲艦がゴジラを狙う目的。答えは単純明快。何故根暗提督の艦隊が中部海域の哨戒を行つた際、敵影を見なかったのか？

そう——W島へ侵攻していた深海棲艦の部隊は、既

にゴジラによって壊滅させられていたのだ。戦艦棲姫率いる部隊は無残に仲間を殺された恨みを晴らすため、ゴジラに戦いを挑んだのだ!

「バクライ トウカセヨ!」

戦艦棲姫はまず対潜能力に優れたツ級に攻撃を命じる。

「グウウツ!」

爆雷攻撃に反応し、ゴジラは不気味な唸り声をあげながら海面へと上昇する。

「カンサイキ ハツカンサセヨ!!」

水面に現れたタイミングを狙い、戦艦棲姫は空母棲姫による爆撃を命じる。

「ギイヤアアオオウウウウツ!!」

周囲に何本もの水柱が出来る中、ゴジラは水面を掻つ切るように身を起こし、展開中のツ級に噛み付く。

「ツ……アアアツ!」

ツ級は抵抗する間もなく、全身の骨をバキボキと折

られながらゴジラに噛み砕かれたのだ。

「ツウジヌカ！ ナラバ……コレナラドウダ！」

ゴジラに先制爆撃を仕掛けた深海棲艦だったが、案の定ダメージを与えられなかった。それならばと、深海棲艦側は戦艦棲姫二隻による主砲斉射を放った。

直撃を受ければ、大和型ですら大破を免れない強烈な砲弾の雨がゴジラに襲い掛かる！

「グウウウウツ……！」

だが、その主砲を以てしても、ゴジラにはダメージを与えられなかった。

「グツ……コレイジョウ ジャマハ サセヌ……!!」

旗艦の戦艦棲姫は歯軋りをしながら前進し、ゴジラとの距離を詰める。

「ウテ ウテー！」

至近距離から撃てば威力が増すと思ったのだろう。

「グウウ……」

だが、その程度の生半可な考えでは、ゴジラに傷一つ付けられないのは自明の理であった。

「ナラバ ナラバ……！」

砲撃を通じないならばと、戦艦棲姫二隻はゴジラに肉薄する。

「グアオオオウツ！」

戦艦棲姫の艤装部分が甲高い咆哮をあげながら、水面に現れているゴジラの胴元に掴み掛かる。艦娘を殴り付ければ一発で昏倒させられるほどの巨腕ならば、ゴジラを制止できるとの目論見なのだろう。

「グウウツ……！」

その目論見は成功し、ゴジラの進撃はようやく止まった。

「ミナゾコニ シズメテヤル……！」

制止したのを見計らい、戦艦棲姫は一斉にゴジラの胴体目掛け主砲を一斉発射する。

「ヤラセハセンゾ……！」

その間空母棲姫二隻による航空爆撃の手も緩めない。

「おおっ！ いい感じですよ、これは！」

敵ながら天晴ですと、青葉はやや興奮気味に戦況を見守る。こちらの手はまったく通じなかったのだ。ならばいかに敵とはいえ有効打を与えられれば、今後の

参考になるからだ。

「ギイヤアアオウウツッ！」

「あっ……」

しかし、僅かな希望はあつという間に散開した。

「グッ……アアウツッ！」

ゴジラは砲撃に物怖じせず、何と抑え付けている戦艦棲姫一隻を掴み取ったのだ！ 戦艦棲姫は艤装部分も含め全長は三メートル未満。対してゴジラは五〇メートル超なのだから、その身長差は歴然としている。

ゴジラにしてみれば、胴元にじゃれ付く生意気な子犬を拾い上げた程度の認識なのだろうが。あの戦艦棲姫をこうもあつさりと捕縛できるのかと、青葉は全身の血が抜かれるほどの衝撃を受けるのだった。

「ギイヤアアツッ！」

ゴジラは戦艦棲姫を掴んだまま、その艤装を無理矢理ひっぺ剥がそうと本体を引っ張り上げる。

「ヤメロ！ ヤメロツッ……！」

戦艦棲姫は必死の抵抗を示し、ゴジラの顔面目掛け主砲を斉射する。それにより、ゴジラの頬を僅かなが

ら傷付けることに成功した。これが、深海棲艦側が挙げられた唯一の戦果であった。

「ギイヤアアオオウウウウウウツッ!!」

ゴジラは渾身の力を絞り、戦艦棲姫の上半身を文字通り引き千切る。

「アアアツッ！」

下半身と艤装を切り離された戦艦棲姫は金切り声をあげながら間もなく息絶え、海の藻屑と化す。

「!? ヨクモ……ヨクモ……!!」

仲間を斃されたことに激昂し、もう一隻の戦艦棲姫は逃げ惑うどころか、ますますゴジラへの敵意を強める。

「どうして、どうして……」

勝てない敵だと言うのは分かたはず。ここは戦術的撤退を行うのが賢明な判断なのに。何故深海棲艦は自らの命を省みず徒に攻撃を続けるのだと、青葉は困惑する。

「仲間を殺された恨みを晴らすため、か……」

動向を見守っていた長門が、ボソツと呟いた。以前

少年提督は報告していた。深海棲艦の原動力は怨恨ではないかと。自分は半信半疑だったが、今の深海棲艦の行動を見る限り、そうとしか言いようがないと。

(ならば、我々はどうすれば“勝利”できるのだ?)
怨恨を糧にしている者を倒したことで、相手が怯むことはない。ますます敵意を強め襲い掛かって来るのであれば、皆殺しにでもしない限り深海棲艦との戦争は終結しないのではと。

「ギイヤアアオオウウウウツ!!」

ゴジラは主人を失った戦艦棲姫の艦装への興味を失せるように海面に投げ捨てると、残存兵力の方へ目を向け、背中を青白く光らせながら、無慈悲な放射熱線を照射する。

「グアアツ!!」

その一撃により艦隊は一瞬にして火の海に包まれ、誘爆を巻き起こしながら水底へと四散する。

「ヨクモ……!! ユルサナイ!!」

残りは胴元に掴み掛かった戦艦棲姫片割れ一隻のみ。彼女はひたすら仲間を殺された恨みをぶつけるように、

ゴジラへの砲撃を行おうとする。

「ナツ ナンダツ? ドウシタツ!」

しかし、ここで異変が起こった。何と深海棲艦の艦装がゴジラへの攻撃を止め、腕を離れたのだ。

「グアアアオウ!」

「グアツ!? ナツ ナニヲスル!」

そして艦装は主人への反逆を行うように、巨腕で本体の両脇に掴み掛かる。

「ヤメロ ヤメロ! アアアアアツ!」

そうしてミシミシと醜悪な音を立てながら、艦装は本体ごと自らを拘束していた鎖を引き千切ったのだ!

「グアアオツ!」

自ら主人を屠った艦装は、解放の歓喜を表すかのように咆哮する。

「グアアアツ!」

そこへ、先程ゴジラに捨てられた艦装が合流する。その艦装はあろうことか、残された下半身部分を残飯処理するかのよう捕食していた。

「一体何が……。どうしてこんな惨いことを……!」

さつきまで一緒に戦っていた仲間を惨殺するんですかと、青葉は口を両手で覆いながら震える。

「……。艦装にも理解できたのだ。この海で一番強い奴が何者であるかを……」

長門は何かを悟ったように呟いた。戦艦棲姫の艦装は、言わば本体にとつての犬なのではないかと。犬は自分の中でランク付けをし、自分より強いと思つた飼い主には従順だが、弱いと判断した飼い主には噛み付くと聞く。

艦装部分はゴジラを自分より強い「主人」だと判断して、本体を見限るように反旗を翻したのだろうと。

「グウウ」

障害を排除したゴジラは、何事もなかったように進撃を再開する。そして自由の身となった戦艦棲姫の艦装二隻は、自ら配下となるようにゴジラの後へと続く。「……。ここまでだな。青葉、観測機を回収しつつ撤退だ！」

最早得られるものがないと判断した長門は、撤退を命じる。

「りよ、了解ですっ！」

青葉は敬礼をして、観測機の妖精に帰艦を命じる。

「我々は貴重な戦闘データを得た。これを一刻も早く鎮守府へと持ち帰り、周知させなければならぬ。」

『我々に勝ち目は無い』と……」

◇ ◇ ◇

青葉が撮影した映像は複製され、各鎮守府へ配られた。たった一匹で深海棲艦の精鋭部隊を壊滅させたゴジラに、誰しもが恐怖と絶望を覚えるのだった。

その後のゴジラの動向は、本土を目指すように西進を続けているとのことだ。本土を目指す理由は不明。しかし幸いなことに、非戦闘時の航行速度は一〇ノットほどとゆっくりで、上陸までの時間的余裕はあるとの見解だ。

ゴジラの対策は連日連夜議論されたが、有効な対抗策は提案されず、徒に時間が過ぎ行くだけだった。

そんな中、英国からようやく援軍を派遣するとの連

絡が入り、横須賀鎮守府ではこれが打開策になればと、淡い期待に湧き上がるのだった。

「失礼します」

「うむ。入りたまっ!?」

横須賀鎮守府執務室のドアを叩く声。気兼ねなく入室を許可した司令長官だったが、現れた人物に言葉を飲み込んだ。

「只今戻りました、司令長官」

動揺する司令長官とは対照的に、その者は落ち着いた雰囲気で敬礼する。

「うっ。うむ。しかしまさか君がこんなに早く帰国するとは思わなかったぞ、冷静提督」

執務室に出頭した人物は、金剛と共に渡英していた冷静提督だった。

「ええ。もう二、三ヶ月はあちらでくつろいでいるつもりでしたが、援軍に水先案内人を頼まれましたので」

「何だど!?」

確かに英国から援軍が来日するという通達はあった

が、既に到着したなどとは初耳だと、司令長官は驚きの声をあげる。

「ええ。つまりは、極秘にしなければならぬ部隊だということですよ」

故に私から具体的なことは申し上げられませんと、冷静提督は口を噤む。

「英国から派遣されたのは、戦艦一、正規空母一。その内正規空母の方は、現在リランカ島で最終調整中で後日来日することです」

「うむ。少なくとも戦艦の方は既に訪れているのか。早速出迎への準備をしなくてはな」

「その件ですが……出迎えは提督たちで行った方が良いかと思われませう」

「どういうことだね?」

艦娘を迎えるのだから、艦娘たちも同席した方が友好的だろうと、司令長官は首を傾げる。

「それほどの機密を持った人物。いえ、それ以上に彼女からもたらされる情報の方が重要でして」

その情報を艦娘たちに伝えるのはワンクッション置

いてからの方がいいと、冷静提督は助言する。

「話の筋がイマイチ掴めんが。とりあえず、会ってみれば分かるということか」

至急会議室の方を準備するよう手筈を整える。終わり次第君は来賓を会議室に招き入れて欲しいと、司令長官は冷静提督に伝える。

「了解です。では後程」

冷静提督は敬礼し、執務室を後にするのだった。



「にひひっ！ やっぱり準備の方も私が一番ね!!」

「よいしょ。よいしょ。ふう、これで完了と。雷、電ー。」

そっちの準備は終わったかしら？」

「終わったわよ、暁」

「なのです！」

会議室の準備は鎮守府に待機中の駆逐艦総出で行われ、一時間半後程で整えたのだった。

「それにしても、艦娘たちが立ち会っちゃいけないな

んて、何か腑に落ちないわね」

英国の艦娘なのだから、きつと一人前のレディに違いない。それだけに自分が迎え入れられないのは残念だと、暁はシユンとする。

「まあ、会議室に入り切らないってのはありそうだけど、秘書艦くらいは同伴しても良さそうよねー」

それも駄目だつてことは何か隠してるわねと、雷は何気なく呟く。

「うびゃあつ!? うーちゃん、何も隠さないぴよん!!」

すると、何故だか準備を手伝っていた卯月が反応し、必死に否定する。

「? 別に卯月には聞いてないわよ?」

「そつ、そうぴよん! あつ、待つぴよん島風。駆けつこならうーちゃんだつて負けないびよん!!」

卯月は動揺しまくりな顔をしながら、一番乗り

に会議室を後にした島風の背を追うように姿を消す。

「んー。何か最近、卯月の様子がおかしいのよねー」
妙にそわそわしてるっていうか、平静を装うとして

るといふかと、雷は首を傾げる。

「酒匂さんの調子が良くないという話なので、その関係なのでしょう。それよりも、暁ちゃん、雷ちゃん」

来賓が気になるのなら電が同席できるよう司令官に掛け合ってみるのですと、電は姉たちに提案する。

「かつ、変わったわね、電。以前のあなたなら積極的にそういうこと言わなかったはずよ」

少年提督がいい意味で電に影響を与えているのねと、暁はちよっぴり悔しかった。

「分かったわ。そういうことなら電に任せるわ」

あたしたちの代わりに盛大に迎えてちょうだいと、雷は電にエールを送るのであった。



「提督、可能ならば私も同席したいのだが」

会議室に向かおうとする熱血提督に対して、長門は頼み出した。

「へえ。オメエがオレ様に頼み事するなんざ珍しいな」

「ああ。援軍は戦艦という話だろ？ ならばビッグ7に名を連ねるネルソン級戦艦一番艦ネルソン、同二番艦ロドネイの可能性もあるしな」

仮にそのいずれかだとしたら、ビッグ7の一人として挨拶しておかなければなど、長門は訴える。

「いや。その可能性はねえな」
だが、熱血提督はキツパリと否定する。

「そんなメジャーな戦艦寄越すんだったら、極秘にするわけねーだろうが」

つまり、英国からの援軍は表に出し辛い戦艦なんだけと、熱血提督は推察する。

「むっ！ それもそうだな……」

「おう、長門。建前で話すなんざ、おめえらしくもねえ」
オレ様に本音を隠せるとでも思ってたのかと、熱血提督は長門を問い質す。

「すまない。最近どうにも感傷的になってしまったな。」

実は……」

やはり提督には隠し事はできないなど観念し、長門は本音を語り始める。

「ひよっとしたら、私みたいに何かしらの心傷を負った戦艦かもしれないと思つてな」

代表格で言えば、マレー沖海戦で沈んだプリンス・オブ・ウェールズとか。最新鋭でありながら開戦当初に沈んだ彼女。きつと日本海軍に対して強い恨みを持つているだろうと。

「成程なあ。そんな嫌味つたらしいことはしねえと思うが、仮に因縁ある奴等を派遣するとなると、確かに大っぴらにはできねえよなあ」

「互いに傷を舐め合うと言えば言葉が悪いが、そういう艦娘ならば私力が力になれると思つてな」

「わーったよ。そういうことなら付いて来な！」

本音をしっかりと話してくれたならオレ様が断るわけねえーだと、熱血提督は笑顔で応える。

「ああ。恩に着る提督」

感謝の言葉を伝える長門だったが、その顔はどんよりとしていた。ゴジラの一件以来、どうにも心が晴れない。英国艦娘との邂逅が自分を良い方向に導いてくれるならば、長門は藁をも掴む思いで熱血提督に同行

する。

しかしこの後、長門の思いは最悪の形で裏切られることとなるのだった。



「これは一体どうしたこののだ!？」

会議室に集った面々に、司令長官は困惑する。鎮守府所属の提督のうち根暗提督と変人提督は欠席で、召集に応じた少年提督と熱血提督は双方とも秘書艦同行だからだ。

「根暗提督はまだショックから立ち直れないとの連絡がありました。変人提督は、ごちらの秘密を探られないようにしたいから」だど」

他の提督たちが席を外した理由を、冷静提督は伝える。

「ふむ。根暗提督の方は仕方ないし、変人提督の方も一理あるな」

ヲ級を捕虜としたのは極秘事項だ。援軍として訪れ

た英国艦娘に易々と暴露するわけにもいかない。

「電と長門か。電は問題ないだろう。少年提督と強い信頼と絆で結ばれた君なら、この先どんな真実を突き付けられたとしても、乗り越えられるだろう」

「そつ、そんな大それたことではないのです！ 電はただ、暁ちゃんと雷ちゃんが気になるって言うから、司令官に同行しただけなのです」

冷静提督から思わぬ称賛を受け、電は顔を真っ赤にしながらあたふたする。

「しかし長門。正直君はやめた方がいいだろう」

詳しくは言えないが、件の艦娘は君の望むような人物ではないと、冷静提督は忠告する。

「水くせえこと言うなよな、冷静提督。長門の奴はそれなりに腹決めてこの場にいるんだぜ？」

テメエに心配されるほど肝っ玉の小さい奴じゃねえよと、熱血提督は反論する。

「そうか。君がいいというのであれば、私ごとやかく言うのは無粋だな」

だが、同席するといっているのであれば心の準備をしてお

いた方がいいと最後の忠告を行い、冷静提督は英国からの来訪者を会議室に招き入れる。

「では、ご入室願います」

「ハロー！ 日本のミナサマ、コンニチハー！ マイネームイズアーサー・ヘルシングデース！ ヨロシクオネガイシマース!!」

貴重な客人を迎えるからと厳肅なムードで身構えていたが、開口一番怪しげな日本語トークで自己紹介されて、会議場にいた面々は凍り付いた。

「うっ、うむ。私は横須賀鎮守府の司令長官だ。ヘルシング卿の来日を、心から歓迎するよ」

司令長官は眉毛をピクピクとさせながらも友好的ムードを崩さないようにと、ぎこちない笑顔で握手を求め。

「オウよ！ テメエがこのボスカい？ あの金剛つて嬢ちゃんリスpektした挨拶してみたが、あんまし受けなかったみてえだな！ ガッハッハッ!!」

まっ、これがブリテンジョークって奴で許してくれよと場を和ませようとするアーサーだったが、会議室に

は白けた空気が充滿するだけだった。

「オレ様は好きだぜ、そういうの！　しかしアンタ、見たところ提督ってなりじゃねえな？」

オレ様も人のコト言えねえけどなど笑いつつ、熱血提督は訊ねる。

「当然さ！　オレは別に提督じゃねえ」

単に援軍の雇い主だから同行しただけだぜと、アーサーは答える。

「英国からの援軍は戦艦だという話だが……。君が連れている黒いフードを被った娘がそうなのかね？」

見たところ、他に援軍らしき当該人物は見当たらない。非海軍の人間に従い、公の場で顔を隠したままど色々腑に落ちないところがあると、司令長官はつい不満をぶつけてしまう。

「初っ端から顔せ見たら失神する奴が出ると思ってた。先に言っとくが、コイツの顔はなかなかシヨッキングだぜ？」

胆の座つてない奴は退散した方が賢明だぜと忠告するアーサー。その言葉に従い席を外した者は一人もい

なかった。

「オーケーオーケー。そんなに見たいってなら見せてやれ、オウツ！」

「イエース！　ご主人サマツ！」

軽快な笑い声をあげながら、アーサーの後ろに同行していた艦娘は、バサツとフードを脱いだ。

『!?』

その瞬間、その場にいた皆が驚きのあまり絶句した。「ヨロシクな！　アタイが来たからには、太平洋上の深海棲艦を皆殺しにしてやんぜ！　キャハハハツ!!」

「ばっ、馬鹿な！　何故そいつがここに!?　どうして人語を話すんだ!？」

甲高い少女の笑い声に全身を震わせる長門。それもそのはずだ。フードから現れた顔は、歴戦の提督なら誰もが戦慄を覚える、サーモン海域の悪夢。戦艦レ級だったからだ!!